

学習がある程度できるようになった学年で海外に行った場合、学習能力が身につけているため、外国語での学習も理解しやすく、幼い頃から海外へ行った子に比べると母国に帰ってきてても比較的容易に学習についていけるようです。

K：海外へ行く(連れて行く)時期というのは、子どもの言語習得にすごく影響があるのですね。

竹：はい。以前は、小さい子のほうが大丈夫、大きくなったらなかなか語学が身につかないし大変だと思われていたんですけど…。幼稚園、またはその前から来日した子どもの学習言語の習得が難しいというケースが見られます。

K：やはり母語が確立されていないから、外国語の習得が難しいということですか。

竹：そうですね、私たちは、最初、海外から日本へ来たばかりの小中高生を対象に日本語指導を始めたんです。ところが、活動を進めていく中で、日本生まれ、幼少期に来日した子どもの中にも日本語に問題がある子がいるという情報があり、最近ではそのような子どもの指導が増えています。

K：地域での日本語指導の現状としてはいかがでしょう。

竹：熊本県では日本語指導は各自治体の教育委員会に任されています。日本語指導がない自治体もあり、自治体間の格差が大きくなっています。日本語指導を導入していない自治体の教育委員会等に日本語指導の必要性を説明し、導入を働きかけているのですが、人員、予算等の問題で対応が難しいケースがあります。

K：外国にルーツを持つ子どもたちが抱える学習での問題は何かですか。

竹：まずは言葉ですね。能力はあっても教科書の文章内容がわかりません。あとは文化の違いです。例えば、中国では大皿から自分が好きなものを直接取って食べるため、給食のように個人的に配布されたものを全部食べなければならないという習慣はありません。そのため、日本の給食が苦手な子もいます。また、海外では学校にプールがある国が少ないようで、水泳の授業も大変なようです。

K：学習以外にも彼らが困ることがありますか。

竹：これは子どもだけの問題ではないのですが、その本人が、その国の代表的な存在になり、母国で起こる事件や問題を周りから言われ、いじめを受けたりからかわれたりします。以前、中国での毒入り餃子問題が起きた時には、時事問題として授業で取り扱われ、戸惑ったこともあるようです。また、最近では環境汚染問題として“PM2.5”が授業で取り扱われ、中国人としていたたまれなくなったり、中国籍の子どもが学校で“PM2.5”と呼ばれいじめにあったりもしました。

「言葉の壁」や、「文化の壁」が解消できても、最後は人間関係の距離間など、「心の壁」が残るといいます。外国の人からすると日本人同士の人間関係の距離感が遠く感じられるようです。日本人は親しくなったと感じていても、日本人独特の距離感が彼らに疎外感を生んでいるようです。



《交流会の風景》

K：学校の外では、いかがでしょうか。

竹：家庭でも問題があります。両親が共働きの場合、なかなか親子で会話する時間もしっかりと取れないので、心のケアができないし、親の言葉(母語)も育ちません。また、国際結婚の連れ子の場合は、両親の離婚後、母国でしばらく祖父母に育てられ、親が日本人と再婚したことで日本に連れてこられます。実の親とも長く離れていたため親子関係の再構築が難しく、また、新しい日本人の親や、新しい家族の中で生まれた兄弟との関係にうまく溶けこめず、家庭内でも孤立してしまう恐れがあります。学校でも家庭でも疎外感を感じてしまう。子ども達にとっては心の問題は深刻だと思います。